



TITLE:

大学図書館について思うこと

AUTHOR(S):

木原, 正夫

---

CITATION:

木原, 正夫. 大学図書館について思うこと. 静脩 1977, 14(2): 1-2

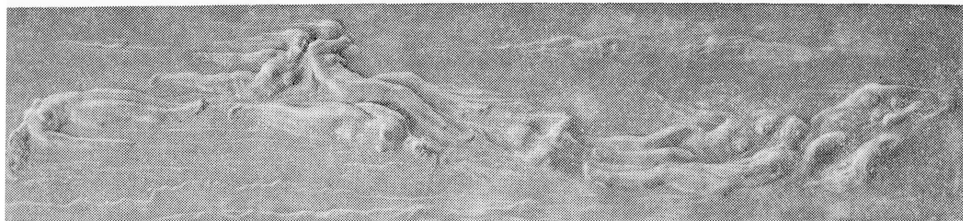
ISSUE DATE:

1977-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36768>

RIGHT:



## 大学図書館について思うこと

経済学部教授 木 原 正 雄

戦後、建ったばかりの中央館は、近代的で偉容を誇っていたが、現在では、附属図書館の文字がなければ、なんか古びた倉庫（書物の倉庫に違いないが）を思わせるわびしい姿になってしまっている。もっとも中央館としての面目は、図書館職員の方がたの我慢と努力によって保たれてきているが。

「大学図書館改善要項」（第2草案）の冒頭には、大学図書館の使命として、つぎのように書かれている。

「大学図書館は、大学における学術情報利用のための中心的機関として、教育及び研究に必要な学術図書・雑誌その他の記録資料を効率的に収集・整理・蓄積して、学部学生・大学院学生及び教員等による学修、研究・調査のための利用に対し、これを効果的に提供するとともに、その他学術情報の利用の円滑化のために必要な活動を行い、大学の教育・研究に貢献することを基本的使命とする。」

ここに書かれているように、大学における教育・研究にとって、大学図書館が不可欠なものであることはいうまでもない。大学図書館がその基本的使命を果すためには、「教育及び研究に必要な学術図書・雑誌その他の記録資料を効率的に収集・整理・蓄積し」学生教職員の利用に供しうの一貫

した体制が整備されていなければならない。

しかしながら現状はどうであろうか。

戦後の科学・技術の進歩は、多くの新しい学術部門の創設をうながし、出版される図書・雑誌・資料の種類や部数は膨大な量に達している。ところが、このような出版物の増大に反比例して、研究書の不足、図書費等の値上り、従来無料頒布されていたものの有料化などのため、研究者個人では、最少限必要な図書・資料さえ購入できなくなっている。このため、図書館にたいする期待はますます大きくなってきているが、図書館の現状は、必ずしもその要求に応じえているとはいえないであろう。

その最大の原因は、図書館自体の予算が十分でないにもかかわらず、図書・雑誌の値上りのみならず、管理運営費等が年々急速に増大しているため、いきおい図書・資料の購入に犠牲がしわよせされざるをえなくなっていることである。予算の不足、人員の不足は、今日大学図書館が直面しているもっとも大きな問題であり、このまま放置すれば、教育・研究に否定的な影響を及ぼすことにもなりかねないところまできているといえよう。

もちろん、金や人<sup>カネ</sup>の問題が解決すれば、すべてがうまくいくということではない。図書館自体がかかえている問題もある。さきにもふれたように、

図書・雑誌の種類、出版点数は急増し、研究論文などの学術情報量（年間約400万件の論文が発表されているといわれている）もまた急増している。今後この傾向は、科学・技術の進歩、研究者の増加とともに、一層すすむであろうことが予想される。

また旧来の形態での図書・雑誌・資料などにかわり、マイクロフィルム、マイクロカード、マイクロフィッシュ、磁気テープなど新しい形態の資料が増えてきている。

さらにまた、科学・技術の進歩は、新しい学問領域を生みだし、研究領域の分化、領域間の境界の交錯、自然科学部門内のみならず、自然科学と人文・社会科学部門間の協力をますます必要としてきている。

このような学術研究の領域における諸変化、これにともなう利用者の要求の多様化にたいし、現状のままでは、どこまで対応することができ、図書館としての機能を発揮することができるかという問題がある。旧来の収集・整理の仕方、検索や分類の方法では、多様化した利用者の要求に十分答えきれなくなっている。

コンピューター化や形式的な集中方式だけで、すべて解決するものではないが、自然科学部門のばあい、コンピューターなどの導入により、情報処理と情報伝達の集中化、迅速化をすすめること

が必要となってきた。このような点での立遅れはないであろうか。

京都大学では、部局図書館が中心となり、教育・研究に大きな貢献をしてきたし、この点現在も変りない。しかしながら、図書館が科学・技術の進歩に対応するだけではなく、積極的に科学・技術の発展をうながすうえで貢献するためには、部局図書館の自主性を侵さず、その独自性を尊重しながら、部局図書館の枠内では解決しえない問題を、全学的立場から取上げ、解決するために、中央館の果す役割はまことに大きいものがあるといえよう。また中央館独自の活動分野も拡大している現在、中央館の役割、機能はいかにあるべきかを明確にすることが急務ではないだろうか。

幸い、林館長のもとで図書館の改善について鋭意検討がすすめられている。たんなる検討に終ることなく、せっかく貴重な図書・資料の蓄積をもつ京大図書館が、事態の進展に遅れることなく、その機能を果しうるよう実りある結論が一日も早く出されることを祈るものである。なお、図書館が教育・研究に貢献しうるか否かは、実際に運営にたずさわる職員の方がたに依存することが多い。広く職員の意見を聞くことも運営改善のために不可欠ではなかろうか。最後にこのことを申し添えておきたい。

#### 資料紹介

### 深作光貞氏旧蔵書寄贈される

深作光貞先生（本学文学部フランス文学出身で現在は京都精華短期大学学長）の御厚意により御蔵書の一部分であるフランス文学中世、ルネサンスの研究資料約70冊の御寄贈を受けたが、そのほとんどが19世紀末から今世紀前半にかけてフランスで出版された非常に得がたい資料である。中でも詩人 Marot, Clément (1496-1544) の全集：Le œuvres de Clément Marot de Cahors en Quercy, valet de chambre du Roy; augmentées

d'un grand nombre de ses compositions nouvelles par cidevant non imprimées, ...[Édition Georges Guiffrey] Paris, [1875-1931] 5 vols. front. (port.) illus. 25 cm. は550部限定出版の内の一部で完全に揃っていて、本学でもはじめて所蔵する貴重なエディションである。このような稀観書を文学部に備えることが出来、この分野の研究成果を期待するとともに寄贈者にあらためて深く感謝する次第である。